新 今昔物語

第16話

古文書から見える大東の歴史③

江戸時代の地域社会と「イエ」

江戸時代に地域的まとまりの単位として「ムラ」があったことはよく知られています。そして、その下にはそれぞれ「イエ」が存在していました。建物を表す「家」と区別して、家族によって構成された最も小さな社会集団をイエと呼びます。イエはそれぞれがその集団の中で強いつながりをもって暮らし、そのイエを絶えることなく継続していくことが重視されていました。

一方、支配者層は農耕を行い、税を請け負う存在としてイエを認識し、維持・管理をしていたため、各イエの存続について村役人が力を貸すこともありました。

例えば、家出をして23年間江戸で働いて帰ってきた者を、家族として受け入れたいと考えたり、お咎めを受けて居所追放となった者が親の体を気遣って、その親の老後の面倒を見るので罪を許してほしいと役所に願い出たりしています。

さらに、親の申し付けを聞かずに悪行を続けていた者には、村役人が道理を諭して改心を促してイエの存続を図ったり、親類から養子を迎え入れたりして、イエの名跡を相続させたりしていることを古文書からうかがうことができます。

このことからも、支配者層は家族によって構成されていたイエの継続を重視していたことが分かります。

こうした「イエ」に視点を当てた古文書は、1月8日から3月31日まで歴史民俗資料館で展示されています。

（市史編纂委員　岡村喜史）

父親の面倒をみたいので罪を許してほしいと願い出た古文書
〔文化10（1813）年12月〕